



山の緑は
ボクらの手ぞ
植林学校
球磨郡水上中学校を訪ねる

さあ、緑の運動がことしもやつてきた。
 昨年は、あのすがすがしい阿蘇乙ヶ瀬の緑化行事おや
 さしそうな天皇、皇后さまのお姿の前で、僕たちの学
 校は栄えある植林コンクールの表彰をうけたのだ。
 さらに思えば、二十九年。この村を襲った洪水と山
 津波の惨状が、いまでも幼なかつた僕たちの眼と心に
 灼きついている……………
 この村を山津波から守るんだ
 僕たちはなおいつそう植林をかたく誓いあつた。
 それから五年……………
 いま僕たちの山は、若々しい緑の美しさに照り映えて
 いる。
 (写真は水上中学校と学校林)

ダムサイトのある峡谷

湯の前駅から北に向つてバスで二十分
 流れの緩やかにつた球磨川の深い峡谷
 に、いま築かれた、ある市房ダムが、巨
 大なお城のように白くかがやいて見え
 る。付替道路の上をバスは上りつめ、そ
 こから下を眺めるとこんどはダムサイト
 の上で働く人々が、ちよつと角砂糖にへ
 ばりついた蟻のように小さく見えてく
 る。新橋という所でバスを降り、ここか
 ら二百メートルほど先を歩くと、路の右
 手にすくすくと伸びたシユロの樹々が眼
 に止る。

「水上村立水上中学校」と墨で認めた
 小さな木札の横には、一本の若い杉がこ
 じんまりと植えられてあり、いかにも
 植林学校多のたゝずまいである。
 二階建の長い校舎がL型にひろがり、
 周囲はうっそうとした山の繁みにおゝわ
 れていた。ちよつと授業時間なのだろう
 か。校庭は滑り台やロク木台などが閑か
 な影を投げたまゝ、人かげすらない。

職業カリキュラムと
 しての学校植林

玄関を入るとすぐ右手の校長室から松
 崎校長が出てみえ、職員室へ案内した。
 十幾つかの机がストゥを真ん中にして
 二列に並んでいる。割木や木枝を入れた
 ストゥが急にパチパチと燃えだし、松
 崎校長は、学校の沿革などから話をほじ

める。

「この中学校は二十二年に設立された
 のですが、独自の学校林を持つたのは二
 十五年からなんです。それまでは、岩野
 湯山、古屋敷の三つの小学校と共同で学
 校林を持つていたのです」
 学校林と云いますと、これは当然職
 業科目として生徒の指導に当るわけです
 ね」

「え、そうです」
 「こゝから外を眺めてみましても、周囲
 が山ばかりで、学校林の持つ意味が充分
 肯けられるわけですが、しかし、これが
 職業カリキュラムとしてとり入れられた
 ことについて、実際の場合はどうなんで
 すか？」

「それはいろいろと考えさせられること
 もありますが、何と云つても、先生と生
 徒との間に伸び伸びとした勤労の歓びが
 あるということですよ。山ばかりだとあな
 たがいまおつしやつたように、たしかに
 村の九七パーセントが山林で占められて
 います、生徒の殆どがそのような生活
 環境で育つてゆくわけですから、学校が
 職業教育の課程として学校植林を営んで
 ゆくことに何の不自然さも生れて来ない
 のです。つまり、生徒自身がそのような
 環境と生活体験の中から植林の理論と実
 際とを学ぶことに十分な意義を見出して
 いるわけですよ」
 「そうしますと、生徒の家庭の殆どが山
 の生活をもつて居るわけですか？」

子供たちも杉のように

「いえ、そうとは限りません、しかし、
 この学校植林の目的はまだ他にあるわけ
 です。つまり、植林を三四月ごろやり
 ましてから七八月ごろには、草の下刈
 作業が始まるのです。ちよつと夏休みで
 はありますし、十三名の先生が総出で、
 全校生徒の殆ど(三四〇名位)がこれに
 参加するんですよ。この作業は杉の成長
 をたすけるために伸びた草を一人一人が
 鎌でもつて切り払うことになるんですが
 、なかなか大変な作業で五日から一週間
 ほどかゝるんです。ですから、これには
 合宿が必要だということになつて、こゝ
 で数多くの体験がたのしく生れてくるわ
 けです。中でも、合宿をおして、先生
 と生徒との魂の触れあいと云いますか、
 人間的な美しい心情の結びつきと申しま
 すか、まあそう云つたかたちの生活が、
 生徒の先生に対する卑屈さを自然と解き
 ほぐしながら精神的な向上を強くたすけ
 てゆき、先生の方にも、立場上うちとけ
 てゆく機会が与えられてくるわけですよ。
 とにかく、こどもたちを真直ぐに伸ばした
 杉のように育てることなんですよ」

この水上村の山の半分は雑木林や竹

やぶでおおわれている。こんないらな
 いものをなくして、杉や松などの木に

かえるためにぼくたちは夏休みや春の
 植林などを一年もかゝらずつゞめてい
 る。ぼくたちは、いつししようけんめい
 にうえた。下払いもよくやつた。かす
 らきりや雑木きりもいつししようけんめ
 いにやつた。ときには、ハチにさされ
 たりいげでいたるところをひつかさま
 わされたり、かやでひきさいたりして
 も、木が毎年毎年大きくなることをた
 のしくながめてわすれていた。今年も
 またやつてきた。今年はずいぶんよ
 りはだいが大きくなつていた。いちばん
 上のはつたときは、のどがからから
 にかわいてたおれそである。それで
 もみんな協力していつししようけんめ
 いにやつた。また水上村のはげ山を少
 しでもなくすことになると思つと、楽
 しみてならない。

以上のような一文で、生徒の一人一人
 が自然に親しみ、ハゲ山をなくすための
 愛郷心にもえて居ることも肯けられるよ
 うだ。
 とところで、この学校林は二十六年の二
 月に六・八ヘクタール、そして三十一年
 八月に八・六ヘクタールをそれぞれ国か
 ら借り上げてあり、その中の約十ヘクタ
 ールに二万九千本の杉や檜が植林をすま
 せている。

村を助ける植林

「生徒たちが汗水たらして植えた杉や檜

も、これから二十五年もたちますと間伐
 ができ、また四十年以上にもたちますと
 皆伐することになるのだそうですが、こ
 のようにして伐り出された木材の収入は
 どういうことになるのですか？」
 「え、これは「二官八民」といまして
 ね、二と八の割合で国と村とがそれぞれ
 収益を受け入れることになつて居るん
 です。一ヘクタールに約三千本が植えつ
 られるとして、この学校林にはおよそ四
 万七千本の杉や檜が植林される
 のですから、村の財政に寄与す
 るところは大へん大きいわけ
 ですよ」

「……考えてみますと、生徒の
 勤労をこうした村の財政にも役
 立させて居るとすれば、先輩の
 残した業績というものは、学校
 としてもありがたいことでは
 ね」

「たしかにそのとおりです。で
 すから学校では、生徒の勤労に
 応えるために、例えば経済的な
 理由のために合宿の参加ができ
 ない生徒があつては大きな矛盾
 を生じますので、三十四年度に
 は、村当局にお願いして合宿に
 必要な主食、副食物などの予算
 を十一万円ほど組んでいただいた
 次第です」

植林授業もボクたちの体験からいつそう興味深い……………

熱心な林業研究

そのうち、この学校でははえぬきとも
 云われる松本先生がチヨークを握つたま
 、職員室に入つて来られた。
 「次の時間は植林についての授業受持ち
 になつて居ますので、参観いたしません
 か？」

(次頁へ)

